後、其の上に二年も三年もといふことになつては今日の狀態には餘り理想に馳せ過ぎる觀があるしまた、教育の方法その宜しきを得れば、そう多くの年限を要しない。たゞ其の素地が茲に要求した以下では到底不充分である。

兎に角、幼稚園教育を外的に盛ならしむるにも內的に充實した効果あらしむるにも、今日何より第一の急務は此の保姆養成にある。如何なる形式に於てゝも是非その實現を切望に絕えないのである。

色彩と美術

文學士　菅原敎造

凡そ人の心の中で感覺的の要素と形式的（或は靈的）の要素とは離るべからざるものでありますが兩者の關係は人によつて違ひましてどんな人でも一樣に申すことは出來ません。つまり人によつて感覺的の要素により多く支配される人もあれば形式的の要素に甚だしく影響される人もあるのであります。こゝが理論家や美術家の議論の分れる處で、甲が感覺の印象を申しますと乙は之に對して我々の心の他の方面にもつと强く訴へる要素の狀態を說くといふ始末であります。斯くの如くにして此の兩派の確執は長い間結ばれて未だに解けやうともしないのであります。尤も今は昔に比べて左程に烈しくはありません。藝術的の反應を分けますと作品の形式及ひ意味を主とするものと內容にはかまはず只見たり聞いたりして眼や耳を喜ばせばよいとするものゝ二樣になります。印象派

の如きは後者の適例で畫題が何であらうとも、繪の意味がどうであらうとも、こんな事には少しも頓着せず只華やかな色を以て總てを解決しやうと勉めるものであります。印象派は斯樣な主義でありますから。其の極端論者になりますと往々にして智的秩序などは全く度外視して殆んど狂的に直接の印象に許り熱中して居ります。

扨て是から素畫の彩畫卽ち色を用ゐない線畫きの畫と、色を用ゐた繪との對立について心理的の研究を御紹介したいと思ひます。心理的に申しますと色の感覺は形の知覺より後れて發達したものであることは確な證據があります。未だ視覺の出來なかつたずつと前から、空間の布置卽ち場所の關係を知覺する爲めに、我々には筋肉と皮膚との感覺がありました。そして視覺が出來るやうになつてから無色の感覺は非常に不完全で且つ不安で形に對する知覺と比べてはその根底の薄いことは同日の論ではなかつたのであります。或る人は生れたての赤兒は總て色盲であるといふて居りますがこれはどうかと思ひます。然し如何なる人も視野の全部が色彩に反應するものでないといふのは事實であります。卽ち色を色として見るのは視野の中心部に過ぎないので、この中心を遠ざかつては唯非常に强度の色をやつと認め得る許りで更にもつと遠ざかつて周圍部に行けば全然色覺を失ふのであります。試みに色紙の小さく切つたものを視野の周邊に持つて來ると其の色紙の形だけは判然と分りますが、色はどうかと云ふに、どんな色でも鼠に見えます。若し其本來の色を見樣とするならば其の色紙をもつと視野の中心に近づけねばなりません。是に於て視覺は形には全部反應しますが色に對しては其の一部分より反應しないことが分ります。彼の全色盲患者などは、視野の中心部ですらもどんな色をも見ることが出來ないに

も拘はらず、物の形は間接視野即ち視野の周圍部でもはつきりと分るといふのは、つまり我々の色覺は不安定なもので、稍ともすれば欠陥を生じて未だ色覺といふものゝ出來なかつた時代の人のしたやうな味氣ない經驗を、再び我々に嘗めさせる事を示すものであります。

色盲の人の色の見えないのは當然のことでありますが、さうでない普通の人の中でも甲と乙とでは銘々の生理上の素質の相違から同じ赤なら赤といふ色に對する感じが違ふと說く人がのります。此の說の實否はさて措き、各人の物の色に於ける趣味に著しい相違のあることは形の場合と比較して見て明かであります。これは果して我々の眼にある相違に歸すべきか否かは判然しませんけれども、それは兎に角、形に對する興味は色に於けるものより遙に根底の深いものであるらしく思はれます。元來形に對する興味は之を一種の贅澤といふよりは、人生に缺くべからざる要素の一と稱すべきであります。と申しますのは我々が日常遭遇するあらゆる事物を、或は敵と識り又は味方と認めますのは、實に其の物の形に現れた特徵によるのであります。色彩は此の場合に之れ程重大視されません。早い例が景色にしろ人の肖像にしろ、あの寫眞は光度の明暗を加減する外、何等の色をも現はしてゐないにも拘らず、その與へる印象の深大なことは、とても巧に著色された海圖などの遠く及ぶ所でありません。この事實から云へば形を度外視しての色は少しも意味をなさぬものである事がよく分ります。要するに色彩は我々にとつて無くてならぬものではないのであります。多くの人はどちらかと申せば形に多く興味を感ずるやうであります。然し人によつては此の比較的不必要の色彩の方に却つて多く興味を感ずる人もあります。又人によつては色にしろ形にしろ之に對し

て常人のとても思ひ及ばぬ樣な強い興味を起す人もあるのであります。此の現象は近年に至つて注目されるやうになつたもので此の種の人になると無形のものに形をつけ無色のものに色のある樣に思ふのであります。後者の例として音階の中で高音は黃色に見え、低音は紫に見えるといふ人が實際あります。斯ういふ人は亦聞く言葉毎に色が着いて聞えるのであります。又言葉のみならず其の言葉を組み立てゝゐる音にも一々異つた色を認めます。例へば英語の「サイズ」といふ言語を聞くと初の「サイ」は橙がかつた黃色に見え、終の「ズ」ははつきりと赤く見えるといふのであります。こんな人には色の感じが何物よりも非常に超越して居てその人の注意を獨占して居ると云つて良いのであります。今一つの珍らしい型といふのは總てのものが形ある樣に見えるといふのであります。卽ち心に浮ぶありとあらゆる觀念が、皆一定の形をもつて現れてくるといふのであります。例へば水曜といふ觀念は窓掛の垂れた窓を思はせ、月曜は中央に點のある三角形となつて現れて來ます。以上のやうなのは極く珍らしい例として、一月、二月といふやうな月名やABCや1.2.3.4.などがこたゝとしてはゐますが、とにかく一定の形をとつていつも現れてくるといふ人は澤山あります。

以上のやうな心の奇妙な働が、我々にどれだけの役をしてくれるかは少時措いて、それよりは以上述べたやうな型の分類をしてみますと二つになります。一は形に興味を持つ人でこれは數も多く進化の上からいつても先に發達したものであります、一は色に對して興味を持つ人でこれは數の點からいふても少く且つ珍らしいものであります。その差異をよく心得ておきますと美術家と云ふものは、其專門々々によつて各々獨特の技量を有するものであると云ふ事を認めることが出來ます。

又素人がいろ〳〵な繪の流派をみて、あれがよいとかこれがよいとか評する譯も分るのであります此の二つの型の相違は、やがて畫家が素畫にゆくか彩畫に入るかと定めるものであります、或は色彩にのみ主力を注ぐ畫家があつたり、或は好んで光度の明暗を對比したり又は圖を引いたりする畫家の出るといふのは偶然のことではないのであります。古來有名な藝術家の中でルーベンスやヴェニス派の畫家は前者に屬するもので、レンブラントやミケランジエロの如きは後者の代表的人物であります。

然し若し前にいふたやうな色と形との間の對立許りが初に述べた藝術の感覺的方面と關係的又は形式的方面との間の爭論の要點であるなどこの論の論據は淺薄の誹を免れません。然し感覺と理解力(智惠)との間の對立又は敵對の歷史的敎義はこれよりもつと深い根ざしを持つてゐます。一體限りある心にさう何もかも一時につめることは出來ません。そこで心は經濟法に從つて若し感覺的の要素が優勢となるには心の他の要素が勢ひ壓倒されて收縮せねばならぬことを知つたのであります例へば感覺の印象があまりに明瞭であると印象の意味を解することが出來なくなります。又之と反對に物の相互の關係をよく知らうとしますには勢ひ物體個々に働く感覺の方をおろそかにせねばなりません。卽ちこの場合の感覺からの印象はぼんやりしたものになります。要するに一物を得る爲めには他を犧牲に供さねばならぬといふことになります。斯くの如くにして若し我々が一物に於て色の方を充分認めたいと思ひましたら成るたけ注意して色以外にはその物の意味又は內容を度外視する事が必要であります。例へば書齋から白い窓掛を通して外の景色を眺めますと全體の朦朧としたた景色が非常に紫の調子を帶びて居るものであり

ます。この現象は木は木蔭は蔭として別々に見たのでは起る者ではありません。といふのはさうなりますとつまり物體が個々に強く感覺に印象を與へますため物體相互の巧妙な關係を味ふことが出來なくなるからであります。此の現象は聽覺には一層明瞭でなります。例へば演說を聞く時など講演者のあまりに近くにゐますと其の一言〳〵がガン〳〵と強く聞えて反つて全體の意味を捕捉することが出來ず又之による聯想も起つて來ないのであります。オーケストラを聞く場合もその通りで相當の距離を保つて聞かないと唯々個々の音が聞える許りで肝心の調和した音を聞くことは出來ません。我々が森といひ林といふのも亦この如く木一々を指しては云ひ得ないことであります。

詩らしい詩になりますと或る程度迄感覺的の要素を阻止して居るといふのはやはり此の法則によるものと思はれます。脚韻とか頭韻とかいふものは音律に於る如く心の高等な働を妨げます。小供の詩は其の著明な例であります。勿論例外はありますけれども概していひますと樣式が眞面目に又精神的になればなる程其の中に含む感覺的の分子の減つてくるのが一般であります。然し一方にはシエクスピアが老境に入つてからは踐韻した對句を使はなかつたといふ著明な事實があります。約百記や詩篇の詩には其の特色とする處は韻でもなく音格でもなくて寧ろ感覺では感知し得ない莊重な形式になります。卽ち莊重な語勢で表はされた思想の對偶又は重複であります。若し他の音律があるとしてもそれはあまりに不明瞭で其の存在さへ問題なのであります。

けれどかういふたからとて精練した藝術が必ずしも超感覺的のものであるとは斷言出來ません。最下の傾向は藝術が乾燥無味に流れるのではなくて反つて分離してゆく傾があります。卽ち藝術は

特殊的のものに分れて美をあらゆる方面から疎漏なく認めやうとするのであります。其の特殊的藝術といふ中には感覺から來るはつきりとした瞬間の印象は只有るといふ許りで其の印象の起す表象に關聯した快樂が主となるといふのと、之と反對に全體の連絡を保つ心の働は第二で感覺から來る瞬間の快樂に重を置くといふの丶二種があります。以上二種の藝術の手近の例は音樂と詩とであります。もと野蠻時代にあつては音樂は一の獨立した藝術ではなくて只舞踏の興を添へるものとしてか又は詩に節つけて吟じたに過ぎなかつたのであります。つまり音樂は昔は他の藝術の從僕といふ格であつたのであります。けれど人類が追々發達するにつれて色々の藝術の個々の價値を認めるやうになりました。從つて音樂を今迄の如く輕視することなく之を一の獨立した藝術として取り扱ふやうになつたのであります。卽ち色々と經驗した結果詩なら詩の內容さへよく調つて居れば聽衆の心を得ることはそれだけで充分であつて何も事更にそれに節付けて歌ふ必要はないことを見出したのであります。又音樂にした處で之を詩と一緒に詩の方に半分以上氣を奪はれながら聽くより、音樂なら音樂だけを聽いた方が骨も折れず且つもつと面白く聽けるといふことをも悟つたのであります。今假にハムレットをオペラに使つたとしたらどうでありませう。一體このオペラといふのは音樂と劇とを一緒にしたやうなもので隨つて其の見物人に與へる印象も劇とも音樂ともつかぬ中間の弱いものであります。以上のやうな理由のもとに音樂は舞踏及び詩から全く獨立して自由に發展するやうになりました。今の處、人の耳を樂ませる唯一の藝術は音樂で詩をかういふ目的に使ふことは全く廢れてしまつたのであります。つまり音樂は前に擧げた二種の藝術の中の感覺を主とする

方で詩は內容を主とする方なのであります。隨つて感覺的の音樂に感覺の經驗を無視するやうな音樂をもつて來たからとて勿論歡迎されないのであります。

眼の方の藝術には詩と音樂といふやうな明な分離は行はれてゐません。又これから以後も果して起るか否かは疑問であります。けれども其の兆の萬更無いでもありません。例へば彫刻と繪畫とは分れてよいと思ひます。一體希臘人は建物や彫像を好んで著色したものであります。けれど我々は寧ろ色の著かないものを好んで色の著いたものは低趣味のものとして排斥します。斯くの如く白黑の外色を用ゐないものを好むといふことは色が無くともそれに代るものを味へることを明に證明してゐるのであります。斯くの如き色を用ゐない藝術に對立すべきものは音の音樂に於るが如く色を其の主要素とする一の獨立した藝術であります。

モザイックや壁畫や織物によくある圖案模樣などは稍々此の種の藝術に屬すべきものであります。けれど是等の繪や模樣は色と線とが集つて出來て居るのでもとより色だけの藝術ではありません。通常の繪畫になると猶更色だけではてんで繪にならないのであります。凡そ繪を描くには其の實物の色と共に形をも模寫するのが規定であります。若し畫工の色が極端で不自然であるなら其の言ひ譯として少くとも畫工自身には其の實物がさういふ色に見えると言ひ張るのが普通であります。此の點に於ては音樂家は全く自由でどんな音樂を作曲しやうと其の音樂が作曲家自身の現はさうと覗つて居る音に彷髣たるものであらうとあるまいとそんなことはかまはぬのであります。ベートーフエンの曲の中で彼の有名な運命の神が戸を敲くといふ處の現し方などは實に大膽でとても木の戸を敲く音とは受取れないのであります。若し似て居

るとすれば絃の抽象的の音律と勢とが所謂コッコツといふ音かと思はれる位であります。

斯くの如く音樂の方で自由であるに反し色彩の方に此の自由のないといふのは色自身の性質によるものとは思はれません。色彩が華やかさと人を動かす情緒に富んで居ることは音樂に劣らぬのであります。又若し其の强度と調子とを規則正しく變へて反覆してゆくと色でも音樂のやうに音律の感を與へることも出來ます。是に於て音が色に比べて殊に優つた點はないといふことになります。音樂が藝術の中で早くから獨立した一の藝術となつたといふのは其の機械的に自由に音を出したり又之を速に變化してゆくことの出來る故であります。若し機械的にもつと單純に出來ることなら自然が我々に與へるにも我々の持つて居るやうな聲でなく速にかつ任意に色を出すことの出來る器官を以てしたでありませう。もしこんな器官があつたとしたらそれが生存競爭場裡になつて非常に都合のよいことは申す迄もありません。又若し人が火の色や强さも恰も琴の糸を彈いたり聲の調子や音量を變へるやうに任意に且つ容易に變へることが出來るとしたら光も亦音のやうに自由に使へるものとなるのであります。斯く色を自由自在に使ふことは出來得べからざることの樣に思はれますが又一方からいふと出來さうにも思はれるのであります。勿論今が今といふ譯ではありませんが或る遠い未來でも我々の重寶して居る電氣などはかうして起したものかと歷史の記錄を繰つていふ樣な時が來れば純粹な色が調子よく結合して其の光度や色が音律的に始と中と終といふ風に漸を逐ふて變化してゆくといふやうな美學上の新言語も出來るやうになだらうと思ひます。色だけでは繪を畫くことの出來ないことは前に申した通りでありますが色だけの表情が亦崇高な感を與へ得るこ

とは彼の華やかな日没の光景がどんな感情を人に起させるかを考へてみれば解るのであります。

藝術は無窮であります。隨つて其の心理も亦未だ研究の余地が充分あります。我々が模倣の中に見出す樂や自分自身を表出することの樂、又我々の性質を言ひ表す絶體的必要や藝術、戯曲が氣を爽にする理由等皆研究の好材料であります。こゝに私の述べましたのは藝術の實驗的研究の一端で而も其の研究は藝術的衝動の緒を究めたに過ぎませぬからこれによつて直に哲學的眞理の何物なるかを覗ひ知らうとは無理な注文であります。此の研究は要するに藝術に於る完成した博物學とでもいふやうなもので之によつて美の色々の形を認め併せて如何に其個々の美が總體美に、影響するかを知ることが出來るのであります。及若し此の研究によつて個人的嗜好の起る理由及び藝術の歴史的發達と分離との理由をも説明することが出來れば此の研究は少くとも或る纒つた研究の端緒となすものといつてよいでありませう（ストラットンより）。

如何にして幼兒に圖畫を描かしむべきか

東京女子高等師範學校助教授　藤　五　代　策

幼兒に鉛筆や筆の如きものを與ふると、何よりの大喜びで、そこらあたりの壁でも障子でも遠慮なしに何か自分の思ふまゝの形を描くものである此の自發心を啓發して善良に導かば教育上多大の効果を收め得らるゝものであらふ、さるにも係らず世の父兄は鉛筆や筆を幼兒の大禁物として沒收